

# 発達障害児の親を対象とした「支援ツール教室」の試み —支援教室の経過と親による評価—

武藏 博文<sup>1)</sup>

発達障害児の親を対象に「支援ツール教室」を実施した。参加した親は、実態把握アンケートと目標設定ワークシートをもとにグループワークを行い、子どもの目標行動を定めた。さらに、講話と作成体験を受けて、子どもの支援ツールを作成し家庭で試みた。本論では、支援ツール教室の実実施計画をまとめとともに、その経過を報告して、各研修会と事後アンケートでの親の評価と意見をまとめることを目的とした。支援ツール教室で親の研修過程、および子どもの支援につながる研修プログラムの在り方について検討を加えた。

**Key words;** 積極的行動支援、支援ツール、親支援、支援教室、グループワーク、実物提示、作成体験

## I. 問題及び目的

武藏 (2004) は、発達障害児の親を対象として、積極的行動支援モデルによる親支援教室を試みた。母親がモデルに基づいて子どもの行動を理解し、チャートを記入して話し合うワークから構成されていた。事後評価では、支援教室の内容は分かりやすく、期待が満たされたという結果を得たが、家庭で支援を実際に試みたのは3割程度にとどまった。

この研究実践から、構造化が難しい家庭で、親が支援を計画して実行するには、提供する支援の手立てとその提供の仕方にさらなる工夫が必要であることが示された。そこで、武藏 (2004) は次のような提案を行った。①支援ツールを作成するためのマニュアルを配付し、実例を提示するとともに、支援ツールを作る体験の機会を提供する。②親同士が自分の子どものための支援ツールを工夫して作って検討し合う場を提供する。さらに、③支援ツールを使用するためのガイドラインを配付し、支援ツールを使う擬似的体験の機会を提供する。④親同士が家庭で支援ツールを使ったことを発表し交流して認め合う場を提供する。

本研究では、前述の提案に沿って、発達障害児の

親を対象に、支援ツールによる積極的行動支援モデルに基づく「支援ツール教室」を実施した。教室の実施経過と親（対象者）の評価をまとめて、研修プログラムの在り方を検討することを目的とした。

## II. 方法

### 1. 対象者

対象者は、T市自閉症児者親の会が主催した研修会「支援ツール教室」に参加した者24名であった。対象者はすべて母親で、研修会開始時の年齢は28歳～45歳であった。対象者の子どもの年齢は4歳～15歳であった。

### 2. 支援ツール教室の実施

支援ツール教室は、Table 1 に示すように7回の研修会から成っていた。2005年9月から12月まではほぼ2週おきに、1回の研修会は2時間程度で、T大学多目的研修室において実施した。プログラムは講話に加えて、アンケートやワークシートへの記入、グループワーク、実物提示、作成体験を行い、各自が子どものための支援ツールを作成し、試みた結果を発表するまでが含まれた。

支援ツールによる積極的行動支援モデルは、子どもが分かって動けることをねらいとする。家庭で行いやすく、支援者同士が連携しやすいことを考慮に入れて、Table 2 に示すように4つのポイントで支

1) 富山大学人間発達科学部

Table 1 支援ツール教室での研修内容

1回目	・講話「生活する力を増やそう」支援の進め方 ・ワーク「うちの子いばんアンケートを書こう」子どもの実態把握
2回目	・グループワーク「子ども自慢をしよう」子どもの長所の整理 ・講話「支援ツールで広がる支援」4種の支援ツール ・ワーク「ねらいを絞るワークシートをしよう」支援の目標設定
3回目	・ワーク「ねらいを絞るワークシートをしよう・つづき」支援の目標設定 ・グループワーク「子どものねらいを考えよう」目標の絞り込み・実行条件の検討 ・講話「支援ツール①：いいこといっぱいチャレンジ日記」 ・作成体験「チャレンジ日記を作ろう」
4回目	・作成体験「チャレンジ日記を作ろう・つづき」 ・講話「支援ツール②：チャレンジは自助具で自分から」 ・作成体験「ナンバー雑巾を作ろう」 ・講話「支援ツール③：チャレンジは手順表で自分から」 ・作成体験「おにぎりレシピを作ろう」
5回目	・作成体験「おにぎりレシピを作ろう・つづき」 ・講話「支援ツール④：チャレンジは手順表で自分から・つづき」 ・子どもの支援ツールを作ろう
6回目	・子どもの支援ツールを作ろう・つづき
7回目	・子どもの支援ツールを作ろう・仕上げ ・支援ツール発表会・交流会 ・支援ツール教室修了証の授与

Table 2 支援ツールによる支援のモデル

関連する事柄	行動のきっかけ	子どもの行動	行動の結果
場面や状況を整える	見通しをもって行う	物事を組み立てて行う	前向きにやる気を起こす
支援環境を整える協働ツール ・サポートブック	自発を促す手がかりツール・ スケジュール／手順表	実行を助ける手がかりツール ・自助具／コミュニケーション 拡大手段	認め合う関係をつくる交換記 録ツール・チャレンジ日記
環境	理解	技能	意欲
・支援者が子どもの行動についての共通理解を深め、子どもが力を十分に発揮できるように環境を整えるための支援。 ・子どもの行動に影響しやすい要因を知り、対応の方法を共通理解しておく。	・子どもが手がかりを確認する（参照する）ことで、見通しを持って行動することを学ぶための支援。 ・時間スケジュールと場面状況を理解すること。 ・支援者が子どもの特性と実際の場面を踏まえた課題分析を行うことが大切となる。	・子どもが手がかりを使う（操作する）ことで、行動の仕方を学ぶための支援。 ・自助具やコミュニケーション拡大手段等を使いこなして適切に行動し、その行動の習熟度を向上させること。 ・支援者が子どもの習熟度に応じた最適な援助を続けることが大切となる。	・子どもが支援者から認められ褒められる（動機づけ）機会を作るための支援。 ・子どもの行動を認めた回数を記録し、子どもの分かる形で貯めること。 ・支援者が子どものできることに注目することで、前向きに生活する好循環を作り出す。子どもは自分のしたことを振り返り、自己の行動を統制する第一歩とする。

援を考える（武蔵・高畑，2006）。

### 3. 支援ツール教室の評価

毎回の研修会終了後、そのときの研修内容についての振り返り用紙への記入と、支援ツール教室終了約2ヶ月後に郵送により事後アンケート調査を行った。

各研修会後の振り返り用紙への記入は、そのときの主な研修内容について、①研修内容への興味・関心、②研修内容への理解度、③研修内容の難度、④研修内容の役立ち度、⑤研修内容の分かりやすい工夫の各評定項目を5件法（「1：全くそうでない」から「5：全くそのとおり」）で評定し、その理由

Table 3 第1回教室の展開

配時	活動	留意点
10分	<b>導入</b> ・支援ツール教室全体の日程を知る。 ・本日の日程を知り確認する。	
25分	<b>講話「生活する力を増やそう」</b> ○子どもの支援を行うときの視点：「不安・がまん生活」から「ポジティブ・前向き生活」へ ○子どもの支援の考え方：できることを伸ばすのがポイント  ○支援システムの在り方：支援ツール・支援者・支援環境の組み合わせ	・子どもの生活を、子どもの視点から説明し、前向きな生活の大切さを強調する。 ・子どもの支援において、子どものできることに着目して、力を十分に発揮すること、習熟度の向上を図ること、短所や弱みを補う支援を行うことを解説する。 ・支援システムで、子どもが自分で使える援助手段・支援ツール、子どもの特性を理解した個別の支援者、支援的な社会環境の組合せが重要であることを解説する。
20分	<b>ワーク「うちの子いちばんアンケートを書こう」</b> ○実態把握の要点：子どもの特性、好み、生活環境 ○実態把握「うちの子いちばんアンケート」の記入の仕方	・子どもの長所（特性や好み）の整理の仕方を説明する。 ・特性シート（理解、表現、注意等）、好みシート（好き嫌い、得手不得手等）、環境シート（日課、社会資源等）の記入の仕方を説明する。実際の記入は宿題とする。
15分	<b>休憩</b> ・前年度の支援ツール教室の様子の写真スライドショーを見る。	・前年度の教室の様子を見せて、支援ツール教室についての見通しをもたせる。
40分	<b>親同士の自己紹介</b> ・全員の前へ出て、一人1分程度で行う。 ・振り返り用紙の自己紹介欄をもとに、簡潔に話す。	・休憩時間の間に、振り返り用紙の自己紹介欄（「好きな言葉」「まとまった時間にすること」「褒めてほしい人」等）に記入してもらう。
10分	<b>まとめ</b> ・振り返り用紙を記入する。 ・宿題の説明を聞く。 ・次回の予定の説明を聞く。	・実態把握「うちの子いちばんアンケート」の記入を次回までの宿題とし、次回はアンケートの記入内容を元にグループワークを行うことを予告する。

を記述欄に回答するものであった。

今回は、このうち、以下の8つの研修内容についてまとめた。①第2回教室のグループワーク「子ども自慢をしよう」、および②講話「支援ツールで広がる支援」。③第3回教室のグループワーク「子どものねらいを考えよう」、および④講話「いいこといっぱいチャレンジ日記」。⑤第4回教室の講話「チャレンジは自助具で自分から」と作成体験「ナンバー雑巾を作ろう」、および⑥講話「チャレンジは手順表で自分から」と作成体験「おにぎりレシピを作ろう」。⑦第5回教室の支援ツール作り「子どもの支援ツールを作ろう」。⑧第7回教室の支援ツール作り「子どもの支援ツールを作ろう・仕上げ」である。

事後アンケート調査は、作成した支援ツールのまとめ（「支援ツールまとめシート」）、作成した支援ツールに対する親の使用後評価、支援ツール教室の内容と運営、今後の支援ツール教室の希望について記入するものであった。今回は、このうち、支援ツ

ル教室の内容と運営についてのみ報告する。

支援ツール教室の内容と運営では、①研修に対する親自身の取り組み程度、②研修内容全体への興味・関心、③研修内容に対する期待の満足度、④研修内容への負担度、⑤満足できた活動と負担に感じた活動、⑥支援ツール教室全体に対する総合評価について質問した。①から④、⑥については5件法で評定し、その理由を記述欄に回答することを求めた。⑤については、選択により回答を求めた。

### Ⅲ. 支援ツール教室の実施計画

各研修会の実施計画を、目標、展開、準備、宿題の提出、評価の点からまとめた。

#### 1. 第1回教室（9月11日）

##### （1）目標

発達障害児が前向きに生活するために必要となる支援の考え方について理解する。実態把握の方法を知り、実態把握「うちの子いちばんアンケート」を記入する。自己紹介を通して、参加する親同士の親

Table 4 第2回教室の展開

配時	活動	留意点
5分	<b>導入</b> ・本日の日程を知り確認する。	
55分	<b>グループワーク「子ども自慢をしよう」</b> ・1グループ4～5名に分かれる。 ・目標設定「うちの子いちばんアンケート」を元に、順に自分の子どもの特性や好みについて話す。 ・支援に役立ちそうな子どもの長所をまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの年齢の近い者同士で、事前にグループ分けをしておいて調整する。</li> <li>・最初にグループ内で簡単な自己紹介をする。</li> <li>・話す順番と時間を決める。</li> <li>・話す人と聞く人の役割を説明する。</li> <li>・話し合いながら、役立ちそうな点をアンケートへ書き込み、メモをとるようにすすめる。</li> </ul>
10分	<b>休憩</b> ・支援ツールの実物を手に取ってみる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援ツールの実物に触れさせ、これから行う支援ツール作りについての見通しをもたせる。</li> </ul>
20分	<b>講話「支援ツールで広がる支援」</b> ○支援ツールによる支援：支援の枠組み、4つのポイントでの支援の具体化 ○4種の支援ツール：それぞれの支援ツールの果たす役割と実例	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4つのポイントで支援を考えること、そのそれぞれに支援を具体化すること、子どもや内容に応じて組み合わせることを解説する。</li> <li>・4種の支援ツールの背景となる概念（環境、理解、技能、意欲）と方法（共通理解、参照・確認、操作、動機づけ）を整理して解説する。</li> </ul>
20分	<b>ワーク「ねらいを絞るワークシートをしよう」</b> ○目標設定の手順：リストアップ・絞り込み→実行条件の書き出しと評価 ○目標設定「ねらいを絞るワークシート・その1」の記入の仕方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目標設定の手順として、目標の候補のリストアップと絞り込み、さらに、実際に行うときの条件の書き出しと評価の仕方を説明する。</li> <li>・目標を具体化するための「ねらいを絞るワークシート・その1」の記入の仕方を説明する。実際の記入は宿題とする。</li> </ul>
10分	<b>まとめ</b> ・振り返り用紙を記入する。 ・宿題の説明を聞く。 ・次回の予定の説明を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目標設定「ねらいを絞るワークシート・その1」の記入を次回までの宿題とし、次回はワークシートの記入内容を元にグループワークを行うことを予告する。</li> </ul>

睦を深める。

(2) 展開

第1回教室の展開をTable 3に示した。

(3) 準備

- ・発達障害のある子の支援についての説明資料「思いつき支援ツール1」（この資料は、武蔵・高畑（2006）として公開したものの一部である。）
- ・支援ツール教室全体の日程表
- ・第1回教室の振り返り・自己紹介用紙
- ・実態把握「うちの子いちばんアンケート」
- ・パソコン、プロジェクター
- ・第1回教室用プレゼン（パワーポイントで作成）
- ・前年度のツール教室の様子の写真スライドショー
- ・デジカメ、時計、ストップウォッチ

(4) 評価

親が第1回教室の振り返り・自己紹介用紙に記入する。

2. 第2回教室（9月22日）

(1) 目標

前回、宿題とした実態把握アンケートを使ってグループワークを行い、子どもの長所を知り、それをもとに支援を考える。支援ツールによる支援の概略として、支援の枠組み、4種の支援ツール、支援ツールの果たす役割を理解する。子どもの目標行動「支援のねらい」を定める手順を知り、目標設定「ねらいを絞るワークシート」を記入する。

(2) 展開

第2回教室の展開をTable 4に示した。

(3) 準備

- ・発達障害のある子の支援についての説明資料「思いつき支援ツール1」
- ・第2回教室の振り返り用紙
- ・目標設定「ねらいを絞るワークシート・その1」
- ・パソコン、プロジェクター
- ・第2回教室用プレゼン（パワーポイントで作成）
- ・支援ツールの実物

Table 5 第3回教室の展開

配時	活動	留意点
5分	<b>導入</b> ・本日の日程を知り確認する。	
15分	<b>ワーク「ねらいを絞るワークシートをしよう・つづき」</b> ○目標設定の手順の復習：リストアップ・絞り込み→実行条件の書き出しと評価 ○目標設定「ねらいを絞るワークシート・その1およびその2」の記入	・子どもの目標行動を定める手順を復習する。 ・実行条件を検討する「ねらいを絞るワークシート・その2」の記入の仕方を説明する。 ・各自で、家庭で記入してきた内容を確認し、書き直したり、書き加えさせる。
50分	<b>グループワーク「子どものねらいを考えよう」</b> ・1グループ4～5名に分かれる。 ・目標設定「ねらいを絞るワークシート」を元に、順に自分の子どもの目標行動について話す。 ・子どもの目標行動の実行条件を評価して、必要な支援をまとめる。	・前回のグループワークと同じメンバーで話す。 ・実行条件を話し合い、支援のアイデアを出し合う。 ・話し合いながら、ワークシートへの書き込み、メモをとるようにすすめる。残りの部分の記入は宿題とする。
10分	<b>休憩</b> ・支援ツールの実物を手に取ってみる。	・支援ツールの実物に触れさせ、これから行う支援ツール作りについての見通しをもたせる。
20分	<b>講話「支援ツール①：いいこといっぱいチャレンジ日記」</b> ○チャレンジ日記の意味と働き ○チャレンジ日記の作り方 ○チャレンジ日記の使い方	・資料や実例を使って解説する。 ・子どもに分かりやすい日記カードの作り方、付け方を解説する。 ・様々な日記カードの実例を示す。 ・チャレンジ日記の活用の仕方、実践例を解説する。
10分	<b>作成体験「チャレンジ日記を作ろう」</b> ・チャレンジ日記カードの作成の仕方を知る。 ・子どもに合った日記のつけ方、家庭での利用の仕方を考える	・チャレンジ日記のサンプルを配布し、作成の仕方を具体的に示し、各自が、子どものためのチャレンジ日記を作成するように促す。実際の作成は宿題とする。
10分	<b>まとめ</b> ・振り返り用紙を記入する。 ・宿題の説明を聞く。 ・次回の予定の説明を聞く。	・目標設定「ねらいを絞るワークシート・その2」の記入、各自の子どものためのチャレンジ日記の作成を次回までの宿題とする。 ・次回の作成体験を予告し、はさみ等を持参するように言う。

・デジカメ、時計、ストップウォッチ

(4) 宿題の提出

親が記入した実態把握「うちの子いちばんアンケート」を提出する。

(5) 評価

親が第2回教室の振り返り用紙に記入する。

### 3. 第3回教室 (10月6日)

(1) 目標

前回、宿題とした目標設定ワークシートを使って、各自で目標行動を定めて、その実行条件を評価・検討する。その後に、グループワークを行い、互いに子どもの目標行動を検討し合う。支援ツールによる支援の具体的解説の手始めとして、「チャレンジ日記」の働き、作り方、使い方を理解する。チャレンジ日記の作成を体験する。

(2) 展開

第3回教室の展開をTable 5に示した。

(3) 準備

・発達障害のある子の支援についての説明資料「思いつき支援ツール2」(1に同じく、武蔵・高畑(2006)として公刊したものの一部である。)

・第3回教室の振り返り用紙

・目標設定「ねらいを絞るワークシート・その2」

・パソコン、プロジェクター

・第3回教室用プレゼン(パワーポイントで作成)

・支援ツールの実物

・チャレンジ日記カードのサンプル

・デジカメ、時計、ストップウォッチ

(4) 宿題の提出

親が記入した目標設定「ねらいを絞るワークシート・その1」と以前に提出するはずで未提出の物を提出する。

(5) 評価

親が第3回教室の振り返り用紙に記入する。

Table 6 第4回教室の展開

配時	活動	留意点
5分	<b>導入</b> ・本日の日程を知り確認する。	
15分	<b>作成体験「チャレンジ日記を作ろう・つづき」</b> ・宿題として作成したチャレンジ日記を発表し合う。	・チャレンジ日記の意味と働きについて復習する。 ・各自が作成したチャレンジ日記のつけ方、使い方の工夫点を交流する。
25分	<b>講話「支援ツール②：チャレンジは自助具で自分から」</b> ○自助具／コミュニケーション拡大手段の意味と働き ○自助具／コミュニケーション拡大手段の作り方 ○自助具／コミュニケーション拡大手段の使い方	・資料や実例を使って解説する。 ・子どもが使いやすい自助具／コミュニケーション拡大手段の考え方、工夫の仕方を解説する。 ・様々な自助具／コミュニケーション拡大手段の実例を示す。 ・自助具／コミュニケーション拡大手段を使い続けるための援助の仕方、実践例を解説する。
30分	<b>作成体験「ナンバー雑巾を作ろう」</b> ・1グループ4～5名に分かれる。 ・実物や説明に従って、ナンバー雑巾を作成する。 ・ナンバー雑巾を使って、子どもに合った使い方と適切な援助の仕方を考える。	・ナンバー雑巾の実物を提示する。 ・雑巾やマジックを配付し、実際の子どもと拭き掃除の場所に合わせ、作成するように促す。 ・子どもが使い続けるための、支援者の援助の仕方について考えさせる。 ・グループで、ナンバー雑巾の使い方、援助の仕方を話し合い、発表させる。
25分	<b>講話「支援ツール③：チャレンジは手順表で自分から」</b> ○スケジュール／手順表の意味と働き ○課題の小分けの仕方 ○スケジュール／手順表の手直しの仕方、使い方	・資料や実例を使って解説する。 ・課題の小分け（課題分析）の仕方とポイントを解説する。 ・様々なスケジュール／手順表の実例を示す。 ・スケジュール／手順表を実際の場面で評価し、手直しする手順を解説する。
10分	<b>作成体験「おにぎりレシピを作ろう」</b> ・おにぎりレシピの作成を通じて、課題の小分けの方法を知る。 ・子どもと家庭のやり方に合わせたレシピ作りを考える。	・おにぎりレシピの実物を提示する。 ・おにぎりレシピ用紙等を配付し、環境の整理の仕方、道具等の示し方、加減や程度の示し方を考えて作成するように促す。実際の作成は宿題とする。
10分	<b>まとめ</b> ・振り返り用紙を記入する。 ・宿題の説明を聞く。 ・子どもの支援ツールの作成について説明を聞く。 ・次回の予定の説明を聞く。	・家庭で子どもにナンバー雑巾を使用することを促し、おにぎりレシピの作成を次回までの宿題とする。 ・「支援ツールアイデアシート」を配付し、次回から各自の子どもの支援ツール作りを行うことを予告する。目標行動に合わせて支援ツールを考えること、各自の支援ツールの作成に必要な道具や素材を準備するように言う。

#### 4. 第4回教室（10月20日）

##### （1）目標

前回、宿題としたチャレンジ日記を仕上げ、使い方の理解を深める。支援ツールによる支援の解説の続きとして、「自助具／コミュニケーション拡大手段」と「スケジュール／手順表」のそれぞれの働き、作り方、使い方を理解する。自助具と手順表の作成を体験する。

##### （2）展開

第4回教室の展開をTable 6に示した。

##### （3）準備

・発達障害のある子の支援についての説明資料「思

いっきり支援ツール3」（1に同じ）

- ・第4回教室の振り返り用紙
- ・「支援ツールアイデアシート」
- ・パソコン、プロジェクター
- ・第4回教室用プレゼン（パワーポイントで作成）
- ・支援ツールの実物
- ・ナンバー雑巾のサンプル
- ・ナンバー雑巾の作成体験用具・素材（雑巾、マジック、シール、新聞紙等）
- ・おにぎりレシピのサンプル
- ・おにぎりレシピの作成体験用具・素材（おにぎりレシピの拡大掲示、おにぎりレシピの用紙、はさ

Table 7 第5回教室の展開

配時	活動	留意点
5分	導入 ・本日の日程を知り確認する。	
20分	作成体験「おにぎりレシピを作ろう・つづき」 ・宿題として作成したおにぎりレシピを発表し合う。	・課題分析の意味と実施手順について復習する。 ・各自が作成したおにぎりレシピの使い方の工夫点を交流する。
25分	講話「支援ツール④：チャレンジは手順表で自分からつづき」 ○スケジュール／手順表を使用した事例 ○スケジュール／手順表の応用として、スクリプト、ソーシャルストーリーの説明	・資料や実例を使って解説する。 ・スケジュール／手順表を使用した事例のつまずきと改良点を解説する。 ・スクリプトの話題、書き方、使い方を解説する。 ・ソーシャルストーリーの話題、文型・書き方、使い方を解説する。
60分	支援ツール作り「子どもの支援ツールを作ろう」 ・1グループ6?7名に分かれる。 ・各自で自分の子どもの支援ツール作りを行う。	・各自の進行状況に合わせて、支援ツール作りに取り組みことを説明する。 ・ワークシートやアイデアシートの記入をしている人：アンケートや記入途中のワークシートを元に、実行条件を検討し、必要な支援と支援ツールを具体化するように手助けする。 ・作成体験での支援ツールを作成中の人：作成した支援ツールを子どもに実際に試して、自分の子どもに生かせるように改良・工夫するように手助けする。 ・自分の子どもの支援ツール作りを行っている人：実物や例を示しながら、作り方、使い方についてアドバイスする。
10分	まとめ ・振り返り用紙を記入する。 ・子どもの支援ツールの作成について説明を聞く。 ・次回の予定の説明を聞く。	・次回も引き続き、各自の子どもの支援ツール作りを行うことを予告する。各自の支援ツールの作成に必要な道具や素材を準備するように言う。

み、マジック、サインペン、色鉛筆、穴あけ、リング等)

・デジカメ、時計、ストップウォッチ

(4) 宿題の提出

親が記入した目標設定「ねらいを絞るワークシート・その2」と、各自の子ども用に作成したチャレンジ日記カード、以前に提出するはずで未提出の物を提出する。

(5) 評価

親が第4回教室の振り返り用紙に記入する。

5. 第5回教室 (11月10日)

(1) 目標

前回、宿題としたおにぎりレシピを仕上げ、使い方の理解を深める。支援ツールによる支援の解説の続きとして、「スケジュール／手順表」の働き、作り方、使い方の理解を深める。各自の子どもの支援ツール作りに取り組む。

(2) 展開

第5回教室の展開をTable 7 に示した。

(3) 準備

- ・発達障害のある子の支援についての説明資料「思いつき支援ツール3」
- ・第5回教室の振り返り用紙
- ・パソコン、プロジェクター
- ・第5回教室用プレゼン (パワーポイントで作成)
- ・支援ツールの実物
- ・支援ツール作成のための素材 (カット集、イラスト集、板目紙、工作用紙、ケント紙、画用紙、カラー用紙 (桃、黄、青、緑)、カラーボード、折り紙、封筒 (大、小)、ラミネートフィルム、カバーフィルム、フェルアルバム、リング、クリップ、輪ゴム、両面テープ、剥離テープ、セロテープ、ガムテープ、カラーシール、マジックテープ、マグネットシート、ボンド、セメダイン、のり、マジック (油性、水性)、サインペン、色鉛筆、クレヨン、新聞紙等)
- ・支援ツール作成のための用具 (インターネットに接続したパソコン、プリンター、スキャナ、ラミ

Table 8 第6回教室の展開

配時	活動	留意点
5分	<b>導入</b> ・本日の日程を知り確認する。	
80分	<b>支援ツール作り「子どもの支援ツールを作ろう・つづき」</b> ・1グループ6～7名に分かれる。 ・各自で自分の子どもの支援ツール作りを行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各自の進行状況に合わせて、支援ツール作りに取り組むように促す。</li> <li>・親同士で話し合ったり、助け合ったりすることを促す。</li> <li>・ワークシートやアイデアシートを元に、実行条件を検討し、必要な支援と支援ツールを具体化するように手助けする。</li> <li>・作成した支援ツールを子どもに実際に試して、自分の子どもに生かせるように改良・工夫するように手助けする。</li> <li>・実物や例を示しながら、作り方、使い方についてアドバイスする。</li> <li>・必要な素材の提供や作成の手助けは随時行う。</li> </ul>
25分	<b>支援ツールの作成の進行状況の交流</b> ・各自の支援ツールの作成状況を、全員の前へ出て、一人1分程度で発表する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作成途中でよいので、支援ツールを示して進み具合を報告するように促す。</li> <li>・子どもの視点に立って、理解や行動の仕方、支援ツールの使い方、必要な援助を考えるようにアドバイスする。</li> </ul>
10分	<b>まとめ</b> ・振り返り用紙を記入する。 ・次回の予定の説明を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次が最終回で、各自で子どもの支援ツール作りを行い、一応の仕上げをして発表会を行うことを予告する。家庭で子どもに試してみるように言う。</li> </ul>

ネーター、穴あけ、はさみ、カッター、カッターマット、定規、ホチキス等)

・デジカメ、時計、ストップウォッチ

(4) 宿題の提出

親が記入した「支援ツールアイデアシート」と以前に提出するはずで未提出の物を提出する。

(5) 評価

親が第5回教室の振り返り用紙に記入する。

6. 第6回教室 (11月24日)

(1) 目標

各自で子どもの支援ツールづくりの続きを行う。親同士で互いにアイデアを出し合ったり、作成の手助けや家庭での使い方を検討し合う。

(2) 展開

第6回教室の展開をTable 8に示した。

(3) 準備

- ・第6回教室の振り返り用紙
- ・支援ツールの実物
- ・支援ツール作成のための素材(第5回教室に同じ)
- ・支援ツール作成のための用具(第5回教室に同じ)
- ・デジカメ、時計、ストップウォッチ

(4) 宿題の提出

以前に提出するはずで未提出の物を提出する。

(5) 評価

親が第6回教室の振り返り用紙に記入する。

7. 第7回教室 (12月8日)

(1) 目標

各自で子どもの支援ツールを仕上げる。全員の前で作成した支援ツールを発表する。

(2) 展開

第7回教室の展開をTable 9に示した。

(3) 準備

- ・第7回教室の振り返り用紙
- ・「支援ツール教室修了証」
- ・パソコン、プロジェクター
- ・第7回教室用プレゼン (パワーポイントで作成)
- ・支援ツールの実物
- ・支援ツール作成のための素材(第5回教室に同じ)
- ・支援ツール作成のための用具(第5回教室に同じ)
- ・デジカメ、時計、ストップウォッチ

(4) 宿題の提出

以前に提出するはずで未提出の物を提出する。

(5) 評価

親が第7回教室の振り返り用紙に記入する。



Table 9 第7回教室の展開

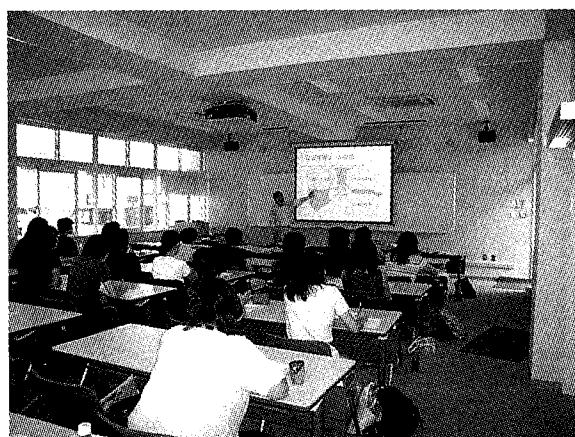
配時	活動	留意点
5分	<b>導入</b> ・本日の日程を知り確認する。	
40分	<b>支援ツール作り「子どもの支援ツールを作ろう・仕上げ」</b> ・1グループ6～7名に分かれる。 ・各自で自分の子どもの支援ツール作りを行い、一応の仕上げをする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各自の進行状況に合わせて、支援ツール作りに取り組むように促す。</li> <li>・親同士で話し合ったり、助け合ったりすることを促す。</li> <li>・実物や例を示しながら、作り方、使い方についてアドバイスする。</li> <li>・必要な素材の提供や作成の手助けは随時行う。</li> </ul>
45分	<b>支援ツール発表会</b> ・各自が子どものために作成した支援ツールを、全員の前へ出て、一人2～3分程度で発表する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作成した支援ツールの作り方とその工夫点、使い方と子どもに試した様子等を発表するように促す。</li> <li>・作成された支援ツールの工夫点、使い方等についてコメントし、親の発表を賞賛する。</li> </ul>
10分	<b>支援ツール交流会</b> ・全員の支援ツールを展示して、皆で順に見て回る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作成した支援ツールを互いに手にとって、作り方や使い方について話し合うように促す。</li> </ul>
10分	<b>支援ツール教室修了証の授与</b> ・「支援ツール教室修了証」を受け取り、記念撮影する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援ツール教室での参加の様子あるいは作成した支援ツールについてのコメントを添えて、修了証を授与する。</li> </ul>
10分	<b>まとめ</b> ・振り返り用紙を記入する。 ・家庭での支援の実行について説明を聞く。 ・事後の予定の説明を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭で支援ツールを使って子どもへの支援を実行するように促す。</li> <li>・教室終了約2ヶ月後に、郵送により「支援ツールまとめシート」と「支援ツール教室事後アンケート」の記入を依頼することを予告する。</li> </ul>

#### IV. 支援ツール教室の経過と親による評価

各研修会の経過・様子と親（対象者）による評価をまとめた。

##### 1. 第1回教室（9月11日）

講話、ワークとも時間通りに進んだ。自己紹介では、一人1分程度としたが、時間をオーバーする人が多かった。休憩時間に前年度の教室の様子を見たが、皆、熱心に見入っていた。初回であったので、支援ツール教室に参加しようと思った動機を振り返り用紙に自由に記述してもらった。出された意見は、



第1回教室：講話「生活する力を増やそう」の様子

①自分の子どもに関する内容、②自分や家族との関係に関する内容、③支援ツール教室への期待、に大別された。

自分の子どもに関する内容として、「子どもの分からないことを少しでも理解したい」「少しでも子どもと共感できたり、意思が伝わり合えたらと思う」「指示待ちの子ども様子を見て、自分でできることが増えたらよい」「子どもが離れだしたので、自立の手助けになれば」「子どもが日常生活をスムーズにできる方法を教えてほしい」「子どもが地域で一人で将来、生活するために」等の意見があった。

自分や家族との関係に関する内容として、「家族が生活しやすく、毎日楽しく過ごせるように」「親として何か手助けできることがあると思えば参加した」等の意見があった。

支援ツール教室への期待として、「支援ツールという言葉も知らなかったもので、分かりやすく教えてほしい」「家ではなかなかツールを作る暇がないので」「私が思いつかないような活用の仕方があるのでは」「子どものできることを伸ばすためのヒント

を得たい」「他の人の意見を聞きながら、よい物ができるとよい」等の意見があった。

## 2. 第2回教室（9月22日）

グループワーク「子ども自慢をしよう」は、初対面同士の人もいて、話がとぎれることもあったが、進むうちに次第にうち解けて、互いの子どものことを出し合うようになった。子どもの年齢の近い人同士でグループ分けを行ったが、子どもの学校の種別や抱えている問題によっては、話し合いが難しい様子もみられた。

講話「支援ツールで広がる支援」は、プレゼンと資料を使い、ポイントを押さえて行うように心がけたが、短時間で盛りだくさんな内容であった。ワーク「ねらいを絞るワークシートをしよう」では、人によりワークシートの記入の進み具合が異なり、なかなか書き込むことができない人がいた。

今回は、3つの研修内容があり、時間いっぱいであった。

(1) グループワーク「子ども自慢をしよう」について

グループワーク「子ども自慢をしよう」の評定結果をFig. 1にまとめた(図中の数値は評定の平均値、上下のマーカーは評定の範囲を表す。難度は反転表示し、下がるほど「難しい」という評価であることを示す。Fig. 1からFig. 9のいずれの図も同じ)。

グループワークの「理解度」は評価が分かれた。「話すことにより改めて気がついたことや気付かされたことがあった」「話すことの大切さを改めて思った」「他の方の話が聞けて参考となった」「他の方の工夫が聞けてよかった」等の意見がある一方で、「楽しかったが、参考となるかは疑問」「自分も恥ずかしながら、自慢を楽しくしたつもり」という意見があった。

グループワークの「難度」は「そのとおり」「どちらでもない」という評価があった。「時間が足らず、他の方ともっと話しがしたかった」「時間が押されるのが気になった」「時間が少なく感じた」等の意見があった。

グループワークの「役立ち度」は「全くそのとお

り」という前向きな評価が多かった。「子どものよいところを探して話せてよかった」「自分の子どものことをよく考えられた」「子どものよいところを聞いてもらえた」等の意見である。その一方で、「こんなことがよいことなのかなと思った」「自分に甘いところがあると思った」「子どものよいところは分かってないと思った」という意見があった。

(2) 講話「支援ツールで広がる支援」について

講話「支援ツールで広がる支援」の評定結果をFig. 2にまとめた。

講話の内容についての「関心」「役立ち度」「分かりやすい工夫」は高い評価が多かった。講話の内容の「理解度」と「難度」は評価が分かれた。「支援ツールの種類や目的の違いが分かった」「支援ツールの必要性がよく分かった」「ツールを作る、やる気が出てきた」「漠然ですが、イメージが湧いてきた」等の意見があった。その一方で「目標等細かなところを決めないと作れないことが分かった」「目標をどのように立てるのか分からない」「どのようなツールが必要なのか分からない」「子どもを思い浮かべ、どんなものを作るか考えてしまった」という意見があった。

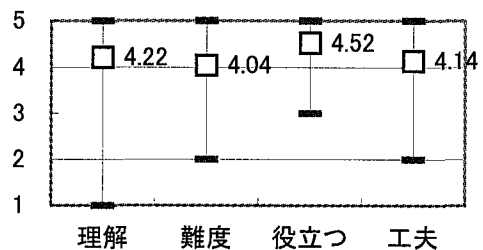


Fig. 1 グループワーク「子ども自慢をしよう」

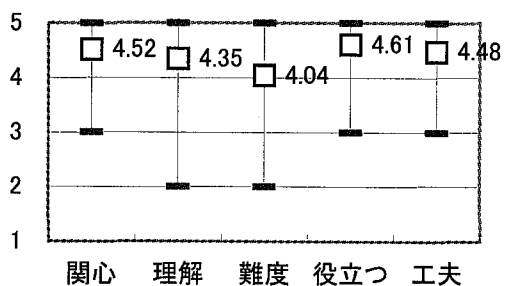


Fig. 2 講話「支援ツールで広がる支援」

### 3. 第3回教室 (10月6日)

グループワーク「子どものねらいを考えよう」は、2度目のグループワークであったので、スムーズに進行できた。一人6分程度としたが、時間を過ぎて話し合いがつきない場合が多かった。

講話「いいこといっぱいチャレンジ日記」は、プレゼンと資料に加えて、実例や日記カードのサンプルを提示し、具体的に説明を行えた。

最初の講話と作成体験なので、時間に余裕を持ちながら進化した。

#### (1) グループワーク「子どものねらいを考えよう」について

グループワーク「子どものねらいを考えよう」の評定結果をFig. 3にまとめた。

評定結果は、前回のグループワークと同様の傾向であったが、全体的に評価が高まった。子どもの目標に関する具体的な意見が多かった。「自分では見えない点に気づかされた」「感じていて答えが出なかったことが具体的に見えてきた」「気づかされることが多く、取り組んでみたいと思った」「よいアイデアを聞いて参考となった」「絞り込みは難しかったが、早く作って使いたい」「自分だったらと具体的に考えられた」等の意見である。

その一方で、目標設定に関する迷いもみられた。「せっかく作るのだから、難しいことに挑戦させたくなくなってしまう」「目標を絞るのは難しい」「目標の絞り方が分かったが、本当にこれでよいのか不安」「ねらいが分からなくなった。考え直し」「話しをすると、自分の曖昧なところがはっきりした」

グループワークの「分かりやすい工夫」についても「もっと時間があればよい」「時間が少なくて、全員途中で終わってしまった」等の意見があった。

#### (2) 講話「いいこといっぱいチャレンジ日記」について

講話「いいこといっぱいチャレンジ日記」の評定結果をFig. 4にまとめた。

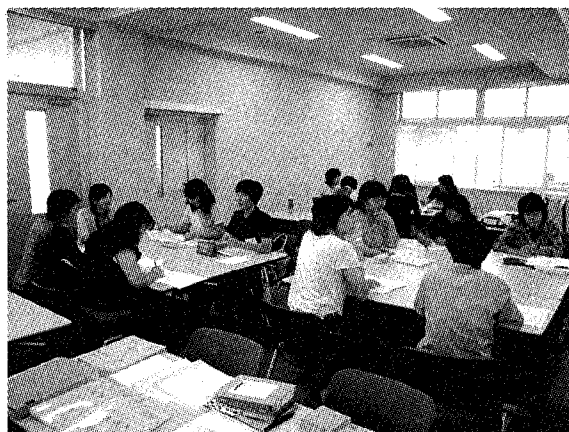
評定結果は、全体に高い評価を得た。「チャレンジ日記を作って学校でもらおうと思った」「日記は前よりつけていたが、ぜひチャレンジ日記に移

行したい」「チャレンジ日記の作り方、注意点を学べてよかった」「支援ツールへの知識がさらに深まった」「ツールを作ってみたい」等の意見である。

チャレンジ日記についての具体的な疑問も出された。「褒められるのを嫌がる子にはどうすればよいのか」という意見である。



第3回教室：支援ツールの実物提示



第3回教室：グループワーク「子どものねらいを考えよう」の様子

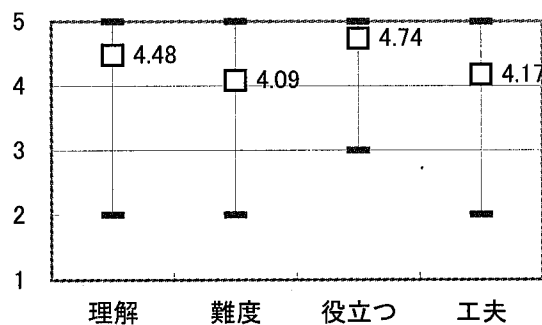


Fig. 3 グループワーク「ねらいを考えよう」

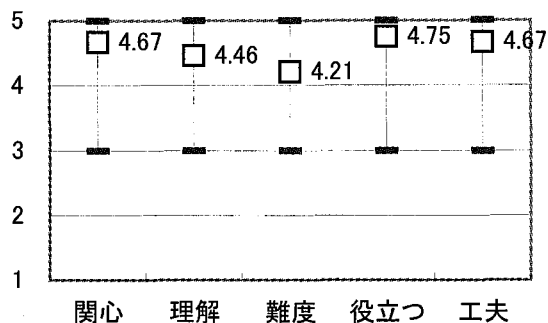


Fig. 4 講話「チャレンジ日記」

#### 4. 第4回教室（10月20日）

宿題としたチャレンジ日記の発表に時間がかかってしまい、途中で切り上げた。2つの講話とも、プレゼンや資料、実物提示等で要点を絞り説明をしたつもりだが、自助具での援助の仕方では説明が通り一遍となり、課題の小分け（課題分析）では説明にかなり時間がかかってしまった。

そのため作成体験の時間が短くなり、作成体験「ナンバー雑巾」は使い方や援助の仕方を考えさせたが、十分な時間がなかった。結局、時間を30分近くオーバーした。

（1）講話「チャレンジは自助具で自分から」と作成体験「ナンバー雑巾を作ろう」について

この講話と作成体験の評定結果をFig. 5にまとめた。

「関心」「理解度」「役立ち度」「分かりやすい工夫」は高い評価を得た。「実際に作って、他の人のアイデアを知ることができた」「自分一人では作れないけど、皆さんと作ると意見が聞けてよい」「雑巾を作って、使い方を考えたことがよかった」「雑巾を子どもに試してみようと思った」「拭く場所に名前をつけるのはよい工夫だと思った」等の意見があった。

「難度」は「そのとおり」「どちらでもない」という評価が多くあった。「雑巾一つでも、いろいろと考える必要があると気づいた」「作ってみて始めて使い方の難しさが分かった」「思っているのと、作ってみるのでは違って勉強になった」「日頃、意識したことがあまりなかった」「短い時間内に製作するのは難しかった」等の意見があった。

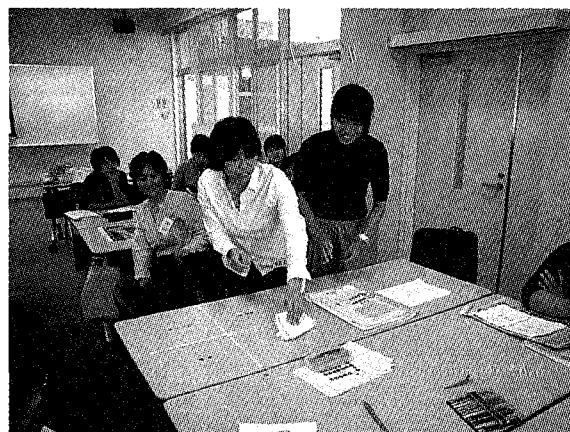
（2）講話「チャレンジは手順表で自分から」と作成体験「おにぎりレシピを作ろう」について

この講話と作成体験の評定結果をFig. 6にまとめた。前の「自助具」の講話と「ナンバー雑巾」の作成体験と、同様の結果であったが、全体に評価が低くなった。

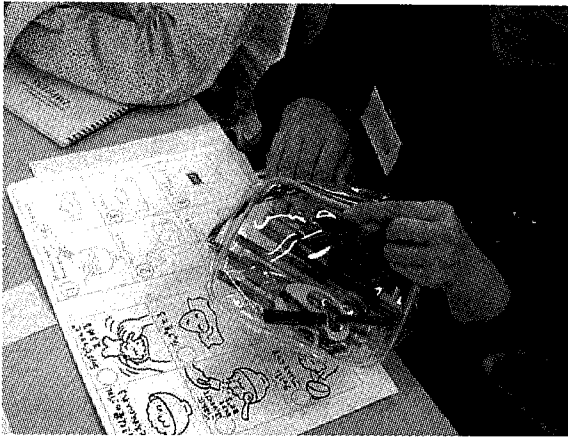
「関心」「理解度」「役立ち度」は高い評価を得た。講話そのものについて「実際の物で説明が聞けた」「実際の話が元になっているので分かりやすかった」

「手順表の作り方が理解しやすかった」等の意見があった。自分の子どもに役立つかについては、「自分の子どもにもできるように思えてきた」「子どもが自分からすることが大事だと思った」「洗濯干しのハンガーのアイデアを何かに使ってみたい」「子どもにあったソーシャルストーリーを書きたい」「おにぎり作りを体験させようと思った」「子どもにあった物をまず真似て作りたい」等の意見があった。

「難度」は「そのとおり」という評価が多く、評定結果も低かった。手順表そのものについて、「ちょっと難しそうだが、勉強になりそう」「手順表はあると便利とは思いますが、作るの難しそう」「手伝いを頼んでも、すぐにしてくれない。どうしたらよいでしょう」等の意見があった。その作成については、「絵が下手なので、分かりやすく描けるか心配」「子どもが小さいので、どこからやればよいのか分からない」「何気ないことを細かく指示しなくてはならないことに気づいた」「おにぎりレシピでも、十何枚にもなりそう」等の意見があった。



第4回教室：作成体験「ナンバー雑巾を作ろう」の様子



第4回教室：作成体験  
「おにぎりレシピを作ろう」の様子

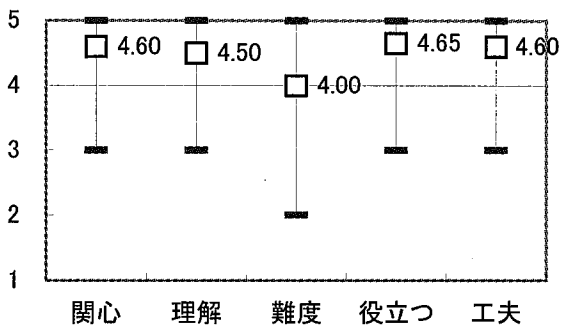


Fig. 5 講話「自助具」・体験「ナンバー雑巾」

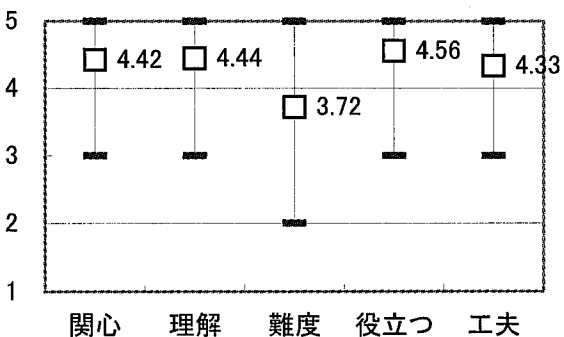


Fig. 6 講話「手順表」・体験「おにぎりレシピ」

## 5. 第5回教室 (11月10日)

宿題としたおにぎりレシピの発表を手早く進行して順に見せ合った。講話の補足は、手順表を用いた事例、手順表の応用としてソーシャルストーリー等の解説といった先回に話しきれなかった内容であった。

その後、各自の子どもの支援ツール作りに入った。アイデアシート等を見ながらこれから考えるという人、写真や素材を準備して早速に作成に取りか

かる人のように進捗にかなりの個人差が見られた。

今回の子どもの支援ツール作りの評価結果を Fig. 7 にまとめた。これまでの講話や作成体験と同様の傾向であった。

「関心」「理解度」「役立ち度」「分かりやすい工夫」は高い評価を得た。みんなで支援ツール作りをすることに肯定的な意見が多かった。「家で後回しになってしまう製作も、教室だとはかどる」「実際に作って見たら、どうすればよいか見えてきた」「周りの方に意見を聞きながら作れるのがよい」「周りの皆さんに刺激されているいろいろなアイデアが浮かんだ」「実際に作れて楽しかった」「ツール作りに必要な材料がたくさんあってよかった」「一人ひとり自分の子どもにあったツールを作っているのに感心した」「他の方のツールを見て刺激を受けた」「親しく意見を交換できたのでよかった」「使ってみた支援ツールの相談ができてよかった」等の意見があった。

「難度」は、「そのとおり」「全くそのとおり」という評価が多く、評価結果も低かった。「どのような工夫があれば、子どもが喜ぶのか考えたい」「今日は、考える時間があってよかった」「具体的にこれという物が決められない」「やってみたいことがあるとあり、まとまらない」「行動の細分化をし始めたばかりがない」「作るの、考えるほど分からなくなってきた」「作ってみてうまくいくのか自信がない」「子どもに試して、作り直してやってみようと思った」等の意見があった。



第5回教室：講話「チャレンジは手順表で自分からのつづきの様子

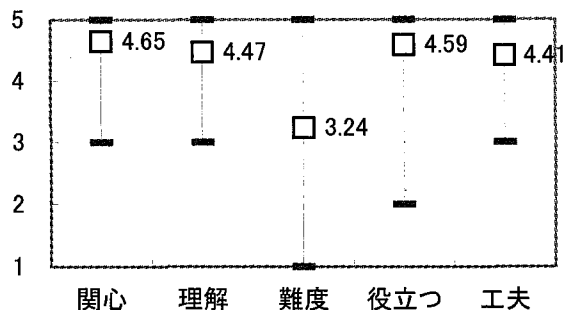


Fig. 7 支援ツール作り (第5回)

## 6. 第6回教室 (11月24日)

来た人から子どもの支援ツール作りを始めた。これから作成にかかる人、ほぼできあがり手直している人、作った支援ツールをすでに子どもに試した人のように進捗にかなりの個人差が見られた。イラスト集やインターネットから絵や写真を探したり、ツールをラミネートしたりで順番待ちとなった。後半に、作成の進行状況を簡単に発表してもらった。その後も残って作成している人がいた。

支援ツール作りについての振り返り用紙の記入を行ったが、帰りの時間がバラバラとなり、書かず帰った人も多く、回収ができなかったため、今回の教室の報告は省略する。



第6回教室：子どもの支援ツール作りの様子

## 7. 第7回教室 (12月8日)

来た人から支援ツール作りを始めた。作成を終わって周囲と話している人がいる一方で、ラミネートをしたり、カットして綴じたりのように、仕上げ

の作業に追われている人も多かった。そのため、開始から1時間を超えて、やっと、支援ツール作りに区切りをつけて、発表会に移った。

発表では、一人一人が作成した支援ツールの目的や使い方、その工夫を披露した。目標行動の意義や支援ツールのよい点、利用のポイントについてコメントするようにした。各自の子どもにあわせた工夫には、感心するところが多かった。

子どもの支援ツール作りの仕上げのときの評定結果をFig.8にまとめた。これまでの講話や作成体験と同様の傾向であった。

これまでと同様に、「関心」「理解度」「役立つ度」「分かりやすい工夫」は高い評価を得た。みんなで支援ツール作りをすることに肯定的な意見が多かった。「いろいろなツールが見られてよかった」「他の方のツールがとても参考となった」「たくさんのアイデアが生まれて感動した」「楽しくみんなで取り組めたのでよかった」等の意見があった。自分の子どもの支援ツールを作成して、「支援ツールが身近になった」「ツールが完成できてよかった」「子どもに役立つツールをどんどん作りたい」「自分の子どもに役立つ新たな発見があった」「作ってみたいと思う支援ツールがたくさんあった」等の意見があった。さらに、支援ツールを使用した上で「実際に役立つことができる支援ツールは素晴らしい」「分かりやすい生活作りを目標に頑張りたい」「保育園の子のツールの利用についてもっと知りたい」「子どもに手伝いをする心が育っていることが、ツールをやらせて分かった」等の意見があった。

「難度」は、前回と同様に「そのとおり」「全くそのとおり」という評価が多く、評定結果も低かった。

「楽しくできたのはよかったが、自分がツールを完成できなかった」「どんな場面でツールが必要かを見極めることが課題」「いざ作るとなると難しい」

「なかなか実際に使うのは難しい」「4ヶ月もかかってできたツールが一つなので」「単純なもの1つしか作れなかった」「作成に入るまでのアンケート等が難しかった」等の意見があった。



第7回教室：支援ツール交流会の様子



第7回教室：支援ツール教室修了証の授与

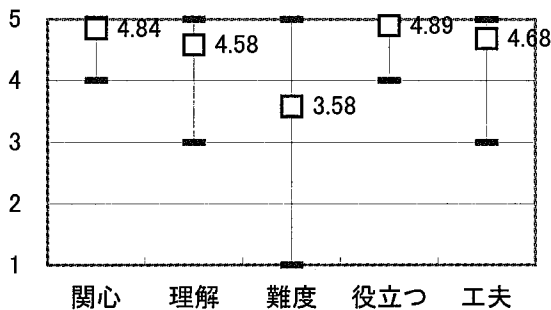


Fig. 8 支援ツール作り (第7回)

## 8. 事後アンケート調査

事後アンケート調査での支援ツール教室の内容と運営についての評定結果をFig.9にまとめた。

(1)「支援ツール教室で真剣に学ぼうとしましたか？」について

ほとんどが「真剣に学ぼうとした」と回答した。子どもとの関係や生活、子どもの将来を理由にあげる意見が多かった。「娘と言葉はないが会話をしたくて」「子どもがしゃべってくれないので、伝える手段を学びたかった」「日常生活に役立つツールを学びたかった」「子どもに意欲はあるが、うまくで

きないので、自分で行えるようにしたかった」「子どもの自立の支援になればと思い」「将来に役立つ教材を知りたかったから」等の意見である。子どもへの支援を理由にあげる意見もあった。「子どものできることが増えたらと思い」「子どもを手助けできるかを知りたかった」「子どもに絶対に必要だと思った」等の意見である。

(2)「支援ツール教室の内容や関連した事柄に興味・関心が深まりましたか？」について

ほとんどが「非常に深まった」と回答した。子どもへの支援の方法について「一人一人の個性にあったものを見ることができた」「子どもにやらせようとするのではないこと」「子どもの興味に応じて分かりやすくする工夫があることに気づいた」等の意見があった。支援ツールによる支援について「いろいろなツールがあるのだと思った」「ツールといえばカードだけだったが、視野が広がった」「今までツールがあったことを知らずにいた」等の意見があった。教室の運営の仕方について「他の方のツール見せてもらい、アイデアをいただいた」「アイデアを出し合ってさらに発展していくところ」等の意見があった。

(3)「支援ツール教室に対する期待を満足できましたか？」について

「非常に満足した」という回答が多かったが、「満足した」「どちらでもない」という回答もあった。非常に満足した理由には、子どもの支援ツールを作成したことに「チャレンジ日記を活用することで、いろいろな課題に取り組むことができた」「実際に使えるものが作れた」「アイデアをいただき、よりよいものになった」等の意見があった。教室の運営の仕方について「他の人を参考にし、自分が作りたいたツールをイメージしやすかった」「いろいろな人と話したり、話を聞いたこと」「他の方のツールがすごく参考になった」「講話を聞いて、次に自分たちで取り組むという方法がよかった」等の意見があった。親自身の体験について、「生きた言葉で体験ができた」「親の押しつけが多かったと反省した」等の意見があった。

その一方で、満足度の評価が高くない理由としては、「子どもが小さいので、うまく使えずに苦労した」「内容が濃い分、時間が足りない感じ」等の意見があった。

(4)「支援ツール教室の内容について負担に感じましたか？」について

評価が分かれた。負担を感じなかったという理由には、「作るのは結構好きなので、それほどでない」「皆さんと会えるのが毎回とても楽しみでした」等の意見があった。その一方、負担に感じた理由としては、「何かしなければならぬという感じ」「娘にとって、分かりやすいものが分からなかった」「子どものできることが少なく、目標を見つけるのに負担に感じた」「多くの方の手助けがあってやっとできたという感じ」「作り始めるまで大変でしたが、決まるとスムーズに行えた」「作成するための案がなかなか決まらなかった」「意外と時間がかかった」等の意見があった。

(5)「支援ツール教室で満足できた活動は？負担に感じた活動は？」について

親が満足できた活動としてあげたものをFig.10にまとめた。「支援ツールの実物提示」や「参加者同士のグループワーク」が満足できた活動として評価された。講話の評価も高かった。作成体験は、各研修会での評価とは異なり、満足できた活動にはあまりあがらなかった。

親が負担を感じた活動としてあげたものをFig.11にまとめた。「実態把握アンケートの記入」「目標設定ワークシートの記入」「支援ツールまとめシートの記入」等の宿題が負担を感じた活動としてあがった。「『おにぎりレシピ』の作成体験」や「子どもの支援ツールの作成」も負担であったという回答が多かった。各研修会での「難度」の評価を反映しているといえよう。

(6)「支援ツール教室に対する総合評価は？」について

「非常に良かった」という回答が多かった。その理由として、親自身の取り組みや学びについて「いろいろと作れて楽しかった」「より深く学べたこと」「また参加して勉強したいと思った」「目標をどのように決めるのか考えることができたこと」「楽しく学べて、必要なツールを作成することができた」等の意見があった。教室の運営の仕方について「自

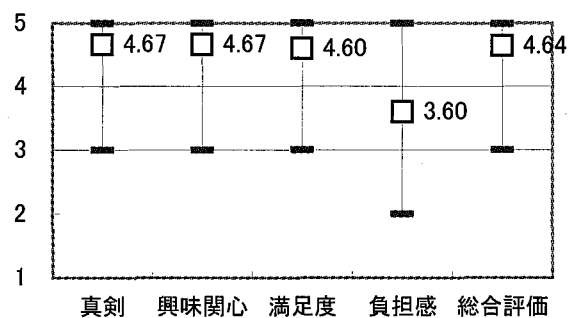


Fig. 9 支援ツール教室の事後評価

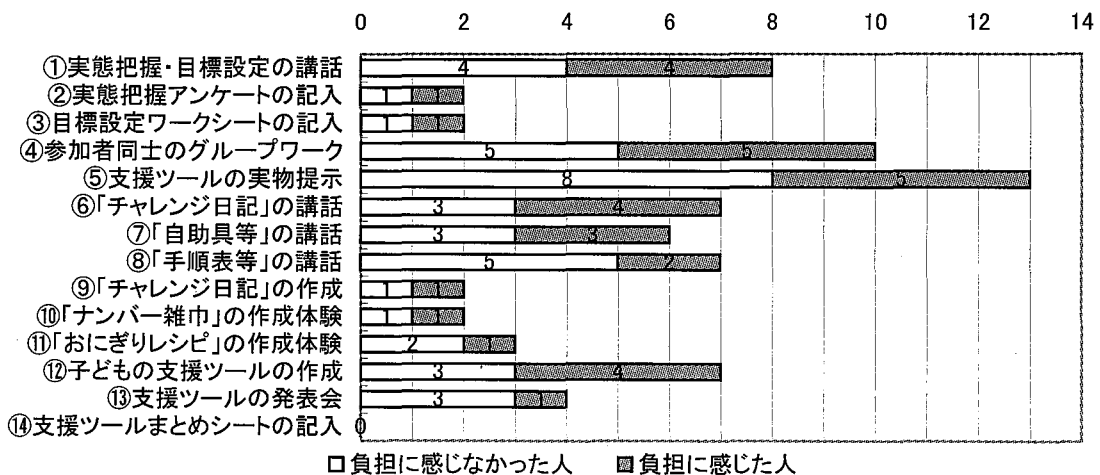


Fig.10 対象者が満足できた活動



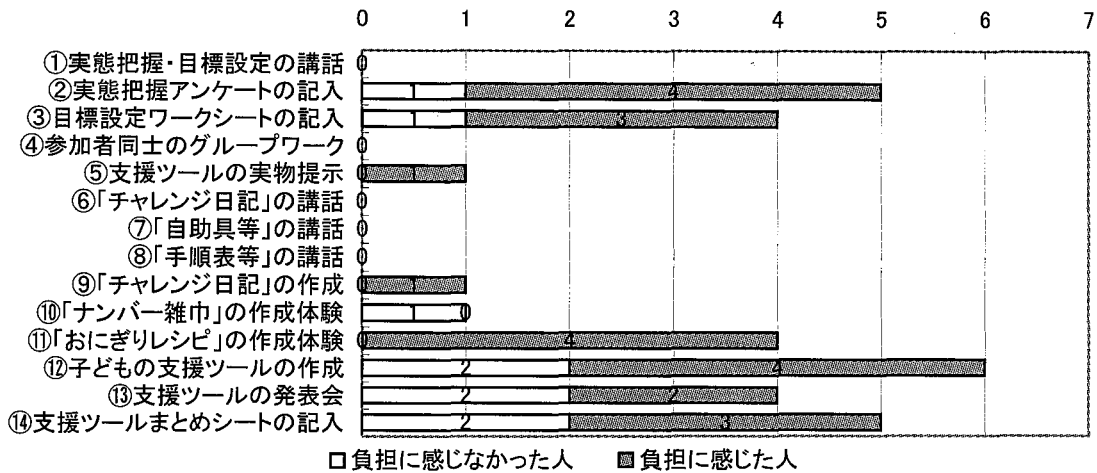


Fig.11 対象者負担に感じた活動

分だけでは作成することができなかったと思う」「他の人のツールを見て、とても参考となった」「皆さんの協力で、素晴らしいツールを作成することができた」等の意見があった。その一方で、「子どもが大きくなれば、もう少し使えるかもしれない」のように、今後に期待する意見も出された。

## V. 考察

7回にわたり「支援ツール教室」を実施し、支援ツールを実感・体験し、親同士で話し合いながら作って使う状況を用意することで、参加した親の全員が支援ツールを使って子どもの支援に取り組めた。支援ツール教室の実施計画と経過を報告して、各研修会と事後アンケートの親の評価と意見をまとめた。

### 1. 参加した親の様子について

親により振り返り用紙に記述された内容は、研修会を重ねるごとに、自分の子どもの支援に関わる具体的ものになっていった。子どもの目標行動の内容や決め方、支援ツールを作る上での工夫や使い方に及んだ。支援ツール教室の目標は、子どものための支援ツールを作って試すことであるが、その過程で、親が主体的に支援ツールによる支援を学んでいったことが遂行として示された。支援ツールを作成したという結果だけでなく、こうした研修の過程をモニターして、研修活動に生かしていくことが大切であろう。

### 2. 支援ツール教室での研修内容について

事後アンケートより、支援ツールの実物提示と親同士のグループワークが満足度の高い活動として評価された。実物を使った説明が分かりやすく、自分の子どもの支援に結びつけて考えやすかった。グループワークで相手に話すことで気づき、相手からのフィードバックで気づかされ、新たなアイデアに出会えた。親支援を目的とする研修において、子どもの支援に家庭や地域で実際に使われた支援ツールの実物提示と、話し合う内容と話し合いの仕方や順番を定めて行う親同士のグループワークが必要不可欠であるといえる。

また、講話に加えて、こうした活動を組み合わせた研修プログラム全体に対する評価も高かった。講話や実物提示を受けて、次に、親が自らワークや体験を行い、そして、自分の子どもの支援に取り組むことである。これらの活動を有機的に組み合わせて、グループワークを活動の単位として研修を進めることである。武蔵(2004)で提案して今回その実施を報告した、親が主体的に研修に参加できる「発達障害児のある子の親支援プログラム」を実行形式として整備していくことが望まれる。

今回の支援ツール教室では、支援ツールを作成する体験を研修の中に組み込んだ。作成体験については、「作ってみて具体的に知ることができた」、「作ったものを子どもに試して使い方・援助の仕方考えた」等意見が多く出され、子どもへの支援の研修としての意義は大きいと考えられる。しかし、第4回

教室（作成体験「ナンバー雑巾」、作成体験「おにぎりレシピ」）の振り返り用紙の評価では「難度」で「難しい」と評価がなされ、事後アンケートでも「おにぎりレシピ」の作成体験が「負担に感じた活動」にあげられた。親は毎日の子どもの養育で苦勞している。それに直面すると、進む方向を見いだせなくなることもある。作成体験は研修として重要ではあるが、実際に子どものことを考えてすすめると、過重な負担となる可能性が示された。

### 3. 家庭での支援につながる支援ツール作成へ向けての提案

作成体験と支援ツールの作成を容易とするためのさらなる工夫が必要と考えられる。

第1に、同じ目的を持った人が集まるサークルという環境である。振り返り用紙の記述や事後アンケートにも、「周りの人からの手助けやアドバイスがあっただけ」という意見が多くあった。子どもの実態把握でも、目標設定でも、作成体験でも、子どもの支援ツールを作成するときも、相談でき、話し合える環境が大切である。

第2に、すでに支援ツール作りに取り組んだことのある親、支援ツールを使った支援をしたことのある親の存在である。講話での研修だけでなく、同じ親の体験による話しから「いろいろと気づかされた」「アイデアが浮かんだ」という意見が多くあった。始めて支援ツールによる支援の研修会に参加する親にとって、先に経験をしている親のアドバイスは大変に貴重である。そこで、すでに支援ツールによる支援に取り組んでいる親も参加できる研修会づくりが必要であろう。初めての方にアドバイスしながら、自分も子どものための支援ツールを考えて参加できる関係作りである。

第3に、支援ツールの実物提示とデモンストレーションである。絵や写真を見るよりも、実物を提示してのデモンストレーションは具体的で効力が非常に強い。これを研修の要所に組み入れていくことである。どのような提示やデモンストレーションが効果的であるのかをさらに検討することが必要である。

第4に、支援ツールの身近で簡便な作成体験である。前述したように、自分の子どもの特性を捉え、目標を考えて、支援ツールのアイデアを具体化し、作って試すのでは、ハードルが高すぎる。かといって、自分の子どもにまったく関係しない作成体験では、親にとって意味が低い。直接に自分の子どもを対象とするのではないのだが、自分の子どもに近くて利用できそうな作成の体験が求められる。研修においては、まず、親がこうした体験を積んで、支援ツールによる支援を身近なものとして知り使うことが大切である。今後、研修プログラムを充実していく上で、身近で簡便な作成体験の開発・充実が求められる。

第5に、追試、改良を主として、子どもの支援ツール作りを進めることである。武蔵・浅川(2006)は養護学校での支援ツールの活用を調査した結果、使われている支援ツールのうち、他の教員や児童生徒が使っているものを参考にして、担任した児童生徒に合わせて改良した「追試・改良」が35%、他で使用しているものを同じように実践した「追試」が22%で、あわせて6割近くを占めたと報告した。支援ツールの考え方を参考にして、教員が自ら作成した「自作」は21%でしかなかった。障害児の教育・支援を本務とし、研修会や書籍等から学ぶ機会が多くある養護学校の教員でも、新たに作成して試すのは容易ではないことが分かった。だとすれば、親を対象とした研修会において、親のニーズに見合った支援ツールの事例を豊富に用意して、追試・改良を主とした子どものための支援ツール作りを考えてもよいであろう。支援ツールの追試・改良が行いやすい研修会の進め方と条件についてさらに検証する必要がある。

### 謝辞

支援ツール教室の実施に当たり、富山市自閉症児者親の会の方々、富山大学教育学部障害児教育の学生諸氏、および富山大学人間発達科学部の水内豊和先生に多大なご協力を頂きました。改めて感謝申し上げます。

## 文献

武藏博文（2004）積極的行動支援モデルによる障害児の親支援教室の試み．富山大学教育学部紀要，58，93-108.

武藏博文・浅川義丈（2006）養護学校における支援ツールの活用と教員研修—支援ツールに関する教

員アンケート調査の結果より—．富山大学人間発達科学部紀要，1（1），179-189.

武藏博文・高畑庄蔵（2006）発達障害のある子とお母さん・先生のための思いっきり支援ツール．エンパワメント研究所.

